

身を飾り装うことは男女に限らず、他者と区別し、同集団への帰属を示すとともに魔除け、護身の意味があった。各時代の貴重な材料でつくられ、身につけた人の地位を反映していることが多い。日常生活から心と体をとき放つ遊びも神まつりに始まり、さまざまな芸能や遊戯具を生み出した。



石 釧・車輪石 柏木遺跡（石釧）、菅原東遺跡（石釧・車輪石）
ガラス玉・管玉・滑石小玉・緑色凝灰岩原石 菅原東遺跡
古墳時代前～中期（4～5世紀）

石釧・車輪石は青緑色をした碧玉（緑色凝灰岩）でつくられた腕輪形の宝器。実用品ではないとされる。石釧はイモガイを輪切りにした貝輪、車輪石は二枚貝のオオツタノハに孔をあけた貝輪の形を写したものと考えられ、その名前は江戸時代につけられた。

古墳時代の前期・中期には緑色の装身具が多い。ガラス玉・管玉・滑石小玉は紐に通し頭、首、腕などを飾る。首飾、腕輪、耳飾など直接身につける装身具は古墳時代で終わる。

腰帯具 平城京跡各地
奈良～平安時代（8～9世紀）

奈良時代官人の服装は着物の色だけでなく、身につけるさまざまなものが、位階によって定められていた。六位以下の官人がつけるベルトには銅製黒漆塗の四角形の金具（巡方）と半円状の金具（丸鞆）をつけることになっていた。石帯に用いられる石銚も黒色系の石が用いられるが、平安時代には各種多彩な色彩の石材が用いられる。



さいころ 平城京左京二条二坊
独楽 平城京跡各地
奈良時代（8世紀）

六角棒のさいころ。賽子は判断の用具で、神の意思を知る占いや神託をうけるためのものから、遊戯具、賭博具ともなっていた。独楽は、高麗伝来であるため、「こま」の名がついたとされる。コマまわしは奈良時代に雑技のひとつとして伝わり、遊具としてひろまった。



ひおうぎ 平城京左京五条二坊
奈良時代（8世紀）

柁目のヒノキ薄板でつくった扇。中国の団扇に対し、奈良時代に日本で発明されたとみられる。木簡を綴じ合わせたメモ帳でもあり、送風具、日除け具として官人の携帯品とされた。



能面 菅原東遺跡
室町時代（15世紀）

「黒色尉」とみられる能面。仮面は仮装、変身の用具で宗教儀礼から発展した芸能で用いられる。能は興福寺に仕える猿楽大和四座から発展したもので、奈良は能楽の発祥地でもある。